



昭和から平成のライバル絵巻

伝説の航跡

百物語

文 鍋島ヒロシ

●岡本義則VS彦坂郁雄

ライバルについて考えてみた。BSでやっていた相撲バラエティ(のような番組)がきっかけだ。ここで最もファンの支持を集めたのが、曙VS貴乃花だった。二人は同期で、対戦成績も25勝25敗とまったくの五分(優勝決定戦を含む)。両者の対決に固唾を飲んだことを覚えている。

ならボートレースは? 歴史的に古いのは、岡本義則VS彦坂郁雄でないかと思う。こちらも同期、6期生である。ただし、時代は昭和の真つ盛り、相撲になぞらえれば、曙と貴乃花どころか、大鵬と柏戸、柏鵬時代のライバル関係だ。

1965年から74年の昭和四十年代に、66年〜68年が岡本なら69年〜73年が彦坂と、二人で勝率トップの座をほぼ独占した。極め付きは昭和四十五年で、彦坂が37連勝と年間勝率9・19、一方の岡本が年間167勝という、この先も不滅と思われる記録を打ち立てている。

だが、ビッグレースにおいて、二人が争った場面は意外に少ない。しかも、二人が真つ向から優勝争いに絡んだのは、皮肉にも二人の関係の終末期のことだった。88年といえば、今から見れば昭和最後の年である。

思えばここに至る、昭和五十年代後半から六十年代初頭にかけて、彦坂は「我が世の春」を謳歌していた。タイトル数を大きく伸ば

して岡本に大差をつけた。ライバル関係は崩れて、ここに野中和夫が登場したのだが、これは後述に任せる。彦坂が勝率に反してタイトルに恵まれなかったのは、ひとえにスタート事故によるものだった。四十年代は大きなレースに出ること自体が少なかった。

その状況が昭和五十年代に変わっていった。五十三年に大時計の短針が20秒針から12秒針になった。全体のスタートにおける精度が増せば、スタート事故の罰則が一件につき40日ずつ(五十五年)、30日ずつ(五十九年)と緩和された。そして昭和六十一年、86年にグランプリが創設された。

当然のようにこれを勝って、彦坂は業界初の1億円選手に輝いた。一方の岡本も五十年代から六十年代初頭にかけて7度SG優出し健在ぶりを見せていた。そんな両者が優勝を争ったのが、呼称が鳳凰賞から総理大臣杯に変わったばかりの、このSG競走だったのだ。

ただし優勝戦の人氣は、1号艇の小林嗣政が彦坂と二分していた。記念タイトル20に迫る実力者でありながら、SGは22年前の地区対抗だけ。闘将として売ってきただ人である。大きなチャンスに気合満々だった。

1号艇から46歳、53歳、47歳。2・3コースが枠番と変わったが、ベテラン勢が内を締めた。レースもまたこの3選手で主導した。中でも小林が気合のスタートを決め

た。先陣を切って1マークを目指した。だが…。

またしても勝負の女神は微笑まなかった。痛恨のターンになった。大きく流れる内側を彦坂が抜けて、岡本が続いた。より鋭く差した岡本がバックで彦坂を捕えたが、そこからのアシが違った。彦坂は完全に仕上げていた。伸び返し気味で2マークに差し掛かると、ここで絶妙の差し返し。後ろから来た桑原を押さえ込みながら、岡本の内をえぐった。2周1マークで岡本は、成す術なく彦坂に突き放された。「関東でビッグを取るの初めてなんだ。これで責任を果たせたね」。

当時においては最多の10回目のSG優勝となった。まさか関東で初めてが生涯で最後になるとは、この時は思いもしなかった。秋に突然でシヨクな引退劇が待っていた。整備違反：艇王と呼ばれた彦坂郁雄の選手人生は、昭和の終わりとともに幕を閉じた。

「ターン回りに差があった」

岡本にとっては6回目のSG準優勝となった。そして同期のライバルが去った後も、翌年大会で7回目の準優勝。「岡本先生」と敬われた名レーサーは、SGV3は意外に少ない回数でも、準優勝に関しては、彦坂(5回)、加藤峻二(5回)、北原友次(4回)など、同世代のスターレーサーの誰よりも多い。その中には7戦全勝で来ながら、最後に苦杯を舐めた70年のダ

ービー(中野信次という往年の強豪の2着。昭和四十五年、167勝を記録した年である)も含まれるが、記念戦線でコンスタントに活躍し続けた人である。

それは彦坂のいない、平成のボートシーンにも刻まれている。元年、4年(92年)とグランプリで2度の優出。後の方は57歳10か月のことだった。加藤峻二や高塚清一(先日)の訃報は残念の先達となるレーサー像を見せてくれた。野中

和夫に「岡本さんこそモンスターや」と言わしめたものだ。後年は植木通彦の師匠として知られた「岡本先生」は、最後の半年間を勝率6・26と立派に走り切り、97年5月まで38年間の選手生活を全うした。

●野中 和夫 VS 彦坂 郁雄

この岡本義則が、彦坂郁雄とは同期の間柄なら、3歳年下で10年遅くデビューした野中 和夫は、後から一気に躍り出て、昭和のライバル絵巻を熱くさせた。実は年齢を見るなら、彦坂と岡本は6歳の差、野中の方がずっと近い。

野中と彦坂は最初から因縁があった。野中のSG級初優出は、昭和四十八年の地区対抗6着だが、彦坂も同乗(4着)している。このときは脇役に甘んじたものの、翌年には有名なSG三連覇。初優勝時の4着が彦坂だ。

第1回笹川賞。地区対抗からファン投票へレースの趣を変えた始まりの大会。2151621①

と出入りの大きい成績で、優勝戦の人氣は彦坂に譲ったが、結果は5コース一気のまくり快勝。勢いに乗った野中は、モーターボート記念を6コース差し、最高タイトルのダービーは5コースまくり差し。いまでは考えられない大技三発でスイープしたのだ。

野中はその後も記録尽くしの76年に、笹川賞とダービーを準パーフェクト優勝。79年のモーターボート記念を取った時点で、北原友次と並ぶSGV6まで伸ばした。一方の彦坂はまだV4に留まっていたが、前述の改正を追い風に逆襲に出た。この頃から引退までが実質的な全盛期だったといえる。

野中と彦坂の戦いについては、かつて最高の名勝負と謳われた、82年のモーターボート記念がある。鳳凰賞を完全制覇し、続く笹川賞も準優勝：絶好調の彦坂に対して、手負いの野中が牙を剥いた一戦だ。こちらはF3の上に8項抵触(事故率1・00オーバー)による半年休みも確定していた。この両雄に名バイプレイヤーの浅香登も絡んで、至高のバトルが繰り広げられた。彦坂に凱歌が上がり浅香が2着。野中は力尽きて3着に甘んじた。

その3年後、またもモーターボート記念で、両雄は再び息を飲む走りを演じた。インで彦坂にジ

第23回総理大臣杯優勝戦

着	枠	選手名	進入	ST
1	③	彦坂 郁雄	2	15
2	②	岡本 義則	3	19
3	①	小林 嗣政	1	07
4	⑤	桑原 淳一	5	15
5	④	今村 豊	4	16
6	⑥	高山 秀則	6	15

2連単 ③-② 1510円(差し)

第31回MB記念優勝戦

着	枠	選手名	進入	ST
1	②	野中 和夫	1	14
2	③	彦坂 郁雄	2	07
3	⑤	今村 豊	6	07
4	①	津田富士男	4	13
5	④	莊林 幸輝	5	08
6	⑥	石原 洋	3	22

2連単 ②-③ 1330円(抜き)

力差しを食らった野中だったが、2マークで差を詰め、2周1マークで捨て身の前面通過。更に接近すれば2周2マークを強烈に差した。ホームで両者のボートが激しくぶつかり、遂に野中が先に出た。彦坂の差し返しも封じて、史上に残る死闘に決着を付けたのだ。昭和のボートシーンを色濃く彩った二人が、SG優勝戦で上位を占めたのは、この一戦だけである。

いまとなつては、史上最高の名勝負は、植木通彦と中道善博による、95年グランプリということになっている。歳月は重い。その後も印象的なレースを数々見てきたし、これからも大舞台で歴史的な熱戦が生み出されていくだろう。彦坂郁雄の名前は、ボート史に突き刺さる棘のような存在になってしまった。いまのファンは艇王といえど：植木通彦と答える。

それでも昭和のあの日。岡本義則や野中 和夫と、ここには書けなかった北原友次や加藤峻二とも、レジェンドレーサーを巻き込んだライバル絵巻の中心にいたのは、彦坂郁雄だったのだと思う。